

# バンテアイ・クデイにある小建物復原の試み

奈良女子大学 古代学・聖地学研究センター  
上野邦一

## 1 まえがき

アンコール遺跡群のうち、バンテアイ・クデイでは1981年以来、発掘調査を継続してきている<sup>1)</sup>。そのうち1994年からは建物 D02<sup>2)</sup> 付近に、1997年からは建物 D11付近にトレンチを設定している(図1)。2000年から2001年にかけて、D11の南で首と胴部を分離した仏像など274点が出土したことは大きな成果の一つで、報告や論稿がある<sup>3)</sup>。

さて、D02やD11の周辺での発掘調査では、瓦がかなり出土する。D02やD11はラテライトを構造主体とする建物であるが、D02やD11以外に瓦の出土量に見合う建物跡はほかに発見されていない。D02、D11は一部が瓦葺建物であった可能性が高く、この建物に葺いてあった瓦が付近に散乱して、発掘調査で出土していると考えられよう。この二つの建物のほかに、D11の西で発見された門遺構(D25)は瓦葺であったと考えられる。そこで、D02とD11の二つの建物と門D25とが、どのような建物であったのか考えてみた<sup>4)</sup>。

クメール建築では、レンガ、ラテライト、砂岩が構造主体となる建物が主流となる以前に、現存しないがかつて木造構造の屋根を持つ建物が多くあったことが、瓦が出土していることから分かる。また、碑文からも木造建築があったことは確実である<sup>5)</sup>。出土する瓦には2種類があり、日本の本瓦葺の丸瓦と平瓦にあたる。クメール建築周辺の発掘調査では、軒先の飾瓦も出土する。この飾瓦は、丸瓦の軒先端に置いていたと考えられる瓦で、多くの瓦葺では軒の先端に軒飾瓦を

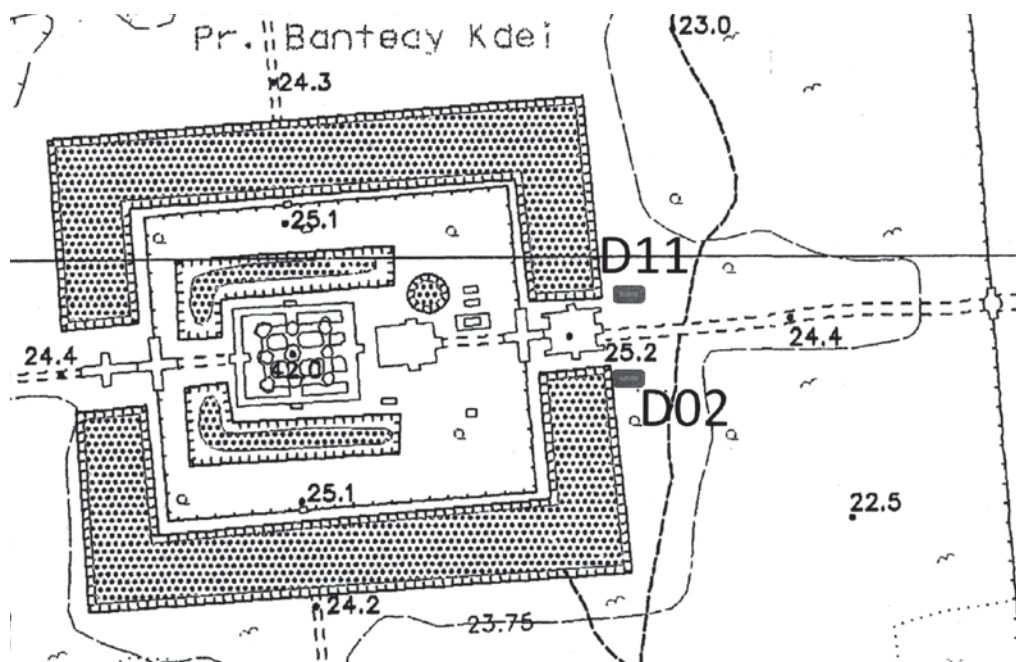


図1 D02、D11位置図

置いていた。ただ、管見するかぎり日本の軒平瓦に相当する飾瓦の出土がなく、この場合平瓦の先端に飾瓦を置かないことが考えられる。平瓦の先端に飾瓦を葺かない事例が日本にかつてあったことは拙稿でも指摘した<sup>6)</sup>。軒平瓦に相当する瓦は出土していないので、平瓦の先端は、日本の事例のように平瓦を数段重ねて置いていた可能性がある。

## 2 D02建物の復原

### (1) 現況 (図2)

D02は東を正面とする祠堂である。主室を中央に置き、副室<sup>7)</sup>が主室の四辺につく(図3)。主室中央にはヨニが残っていて、当初はリングが立っていただろう。構造主体はラテライトで、扉枠、窓枠に砂岩を用いるという常套工法である。

2015年8月に実施したD02周辺の発掘調査で、主室中心から南7.5mほど、北8.5mほどの位置



図2 D02現況写真

で東西に連なると思われる壁を発見している。この壁が東西辺にもあるとして相応の位置では未調査であるが、D02を囲んで四周する壁があったことが想定される。

発掘調査では、この壁の頂部が現地地表下すぐに発見されていて壁本体は埋没していた。壁の底部が旧地表面と考えられるので、D02一帯は、この建物が建設された当時と比較して1.5mほど埋まっていると考えられる。

### (2) 平面の変遷 (図3)

D02建物は増築が認められ、当初、第二段階、第三段階の3時期が考えられる。現況では分かりにくいですが、基壇を観察すると南北の副室の外側にさらに第二副室を設けた基壇が残存していて、第二副室を増築していたことが分かる。さらに、四周に基壇跡があり、増築を行っていたと想定される。この増築部分を第三副室と呼ぶことにする。第三副室は壁体が残存していないので、増築部分の主構造は木造によると想定する。当初の平面は、全体は十字形平面で、主室の東西南北に副室がある。東西の副室の方が、南北の副室よりやや広い。さらに南北の副室は、主室からのみの出入り口がある。

確認できていないが、D02を四周する壁があったとすると、少なくとも東には門があったと想定される。

第二段階は、南北の副室の外側に第二副室を増築する。第二段階の増築部分の構造体はラテライトである。

第三段階は、全体に十字形平面となる四つ角に、それぞれ部屋(第三副室と仮称する)を増築する。ただし、東側の二つの第三副室は、第二副室の出入り口を考慮していて、痕跡から東側に出入り口を設けたことが分かる。西側の第三副室は、第二段階の建物の壁面に沿って目一杯に増

築している。こちらも、痕跡から西側に出入り口を設けている。第三段階の増築部分では、基底部のみが認められ、壁の様相は残っていないので、主構造は木造と考えられる。もし、壁構造であれば、多少でも壁部分が残るのが通常なので、壁の様相が残っていないということは、壁構造ではなかったと判断するのが自然であろう。木造としても、建物内部に間仕切り壁を持ったかどうかは不明で、想定図では間仕切り壁を除いて描いてみた。

第三段階の増築部では、構造壁は残っていないが、入口部の痕跡があり底部のみが残る。この底部は砂岩であり、構造が壁構造であった可能性は、全否定はできない。ただ、その場合でも、屋根を支える小屋組は木造で屋根は瓦葺であっただろう。

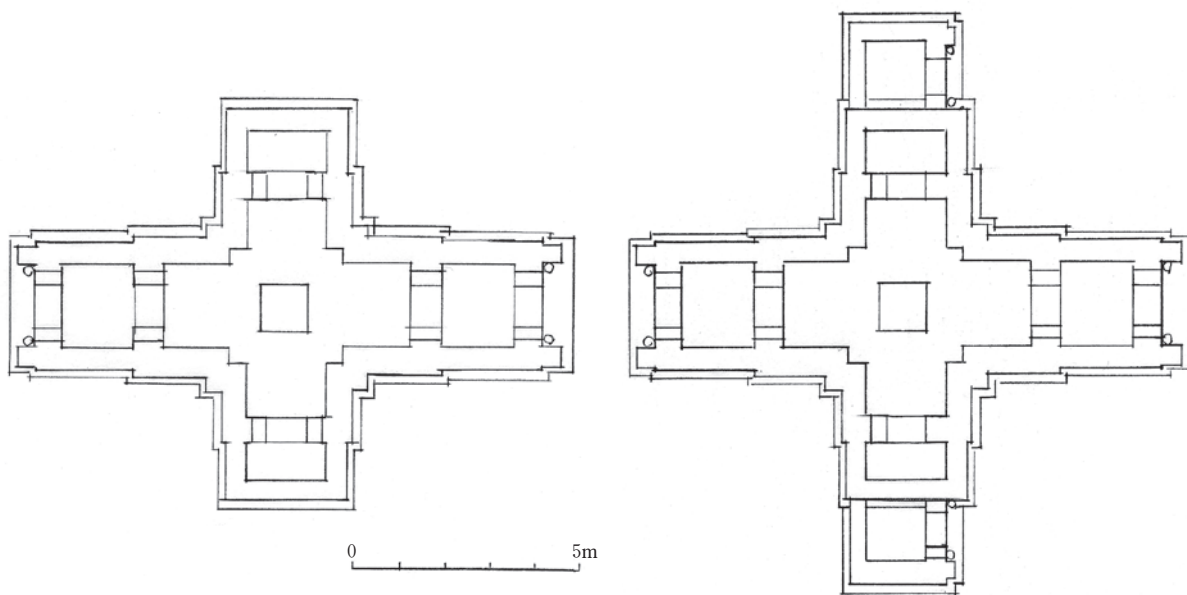


図 3-1 D02当初の平面図 扉は省略している。

図 3-2 第二段階の平面図

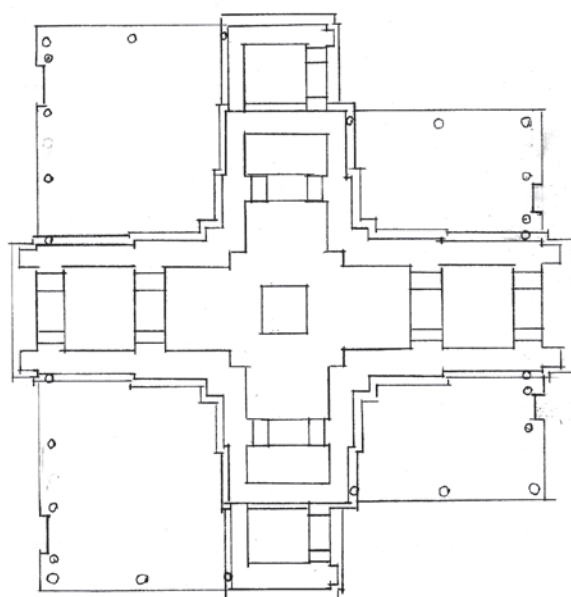


図 3-3 第三段階の平面図

(3) 復原の考察 (図4)

主室と副室は、壁が人間の背ほど立ち上がるので、屋根はおそらくコーベルアーチ<sup>8)</sup>で、主室上部は砲弾型の形状になる構造物になる。第二副室も同じく壁が立ち上がるのでコーベルアーチだろう。前述したように、第三副室は木造瓦葺きと想定される。

入口部分にペディメント (妻壁) が立ち上がると想定して作図している。これに伴って、屋根はもっと複雑だった可能性がある。その場合、屋根のどこかで谷ができ、雨仕舞は一段と難しく

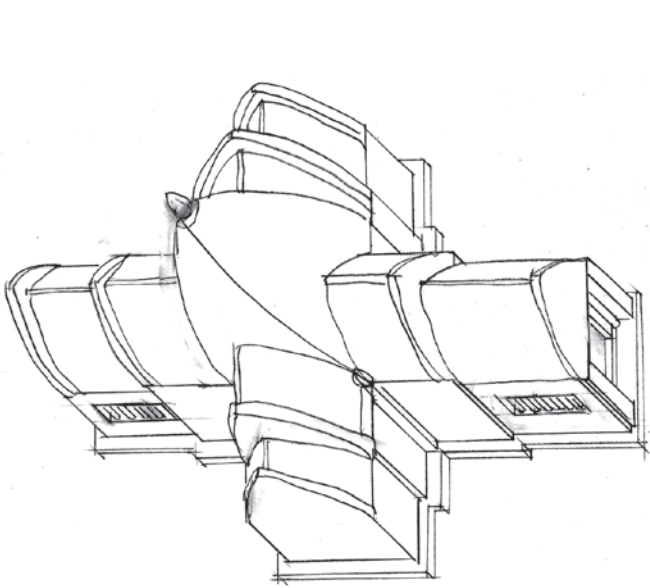


図4-1 D02当初の想定図

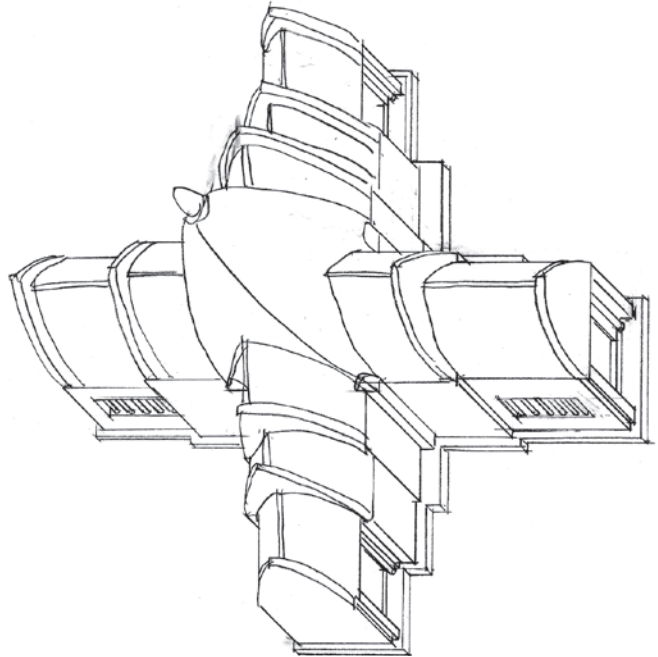


図4-2 D02第二段階の想定図

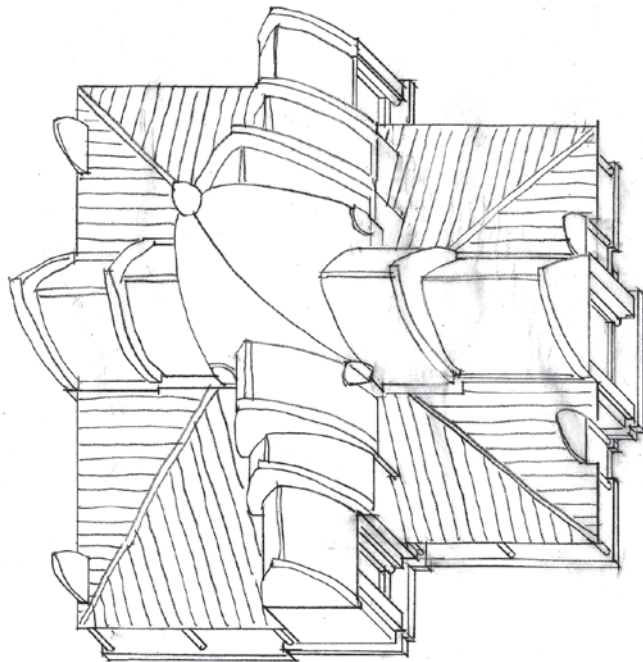


図4-3 D02第三段階の想定図

なる。想定図では、谷部分を造らず単純な屋根を描いた。

木造部分の妻壁の様相は、厳密には不明である。しかし、時代は下るが現存する周辺国にある木造寺院などを考慮すると、D02の妻壁にレリーフを施していた、と考えている。想定図では、細部は描いていない。建物の全体の様相を提示するにとどめていることを御容赦願いたい。

### 3 D11建物の復原

#### (1) 現況 (図5)

D11は、D02と規模・平面は違うがバンテアイ・クデイの中軸線をはさんでD02と対になる建物で、東を正面とする。構造の主体はラテライトで扉枠・窓枠は砂岩であるが、一部の扉枠・窓枠にもラテライトを用いる。ほぼ正方形の主室を中央に配し、主室の東西に副室を置く。東副室の方が西副室よりもやや広い。主室の中央には、ヨニを設置した痕跡があるが、ヨニ本体は失っている。



図5 D11現況写真

#### (2) 平面の変遷 (図6)

当初、第二段階の2時期の変遷が考えられる。

当初は現存するとおりの平面である。第二段階で、南北に副室を、東西に第二副室を増築している。D11建物周辺にペディメントが置いてあり、これらに桁を入れた方形の穴が穿ってあり、桁を大入れした柄穴と考えられる (図7)。このペディメントにはレリーフが施されていて、そのレリーフの一部を壊して柄穴を穿っている。すなわち、建物がいったんは完成した後に、レリーフを壊し、ほぼ見えなくなるのに、増築を行ったことになる。

遺構の現況では痕跡がなく確認できないが、ペディメントの柄穴を考えれば、東西の副室の外

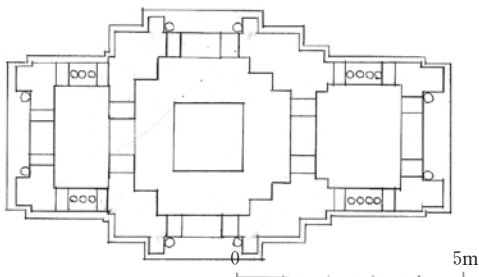


図6-1 D11当初の平面図  
扉は省略している。

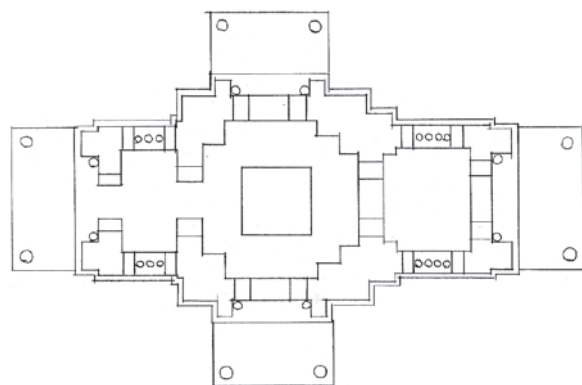


図6-2 D11増築後の平面図



図7 D11周辺に残っている妻壁・枿穴がある：筆者撮影

側にさらに第二副室を増築し、南北には主室の外側に副室はないが、東西の第二副室にならって副室と仮称する部屋を増築していたことになる。

### (3) 復原の考察 (図8)

中央部には人の背丈ほどの高さで壁が残っているので主室上部はおそらくコーベルアーチで、砲弾型の構造物になる。

東西の副室でも、人の背丈ほど壁が残存していて立ち上がっているので屋根部分はコーベルアーチであろう。増築した南北の副室、東西の第二副室に相当する部分の基底部分にあたる部分では、壁の様相をうかがわせる痕跡はない。D02の第三段階の箇所でも前述したように、組積造の壁の痕跡が認められないので、増築した副室は木造で屋根は瓦葺であったと考えられる。

想定図は、図4と同じく、細部は描いていない。建物全体の様子を伝えるための作図であることを御容赦願いたい。

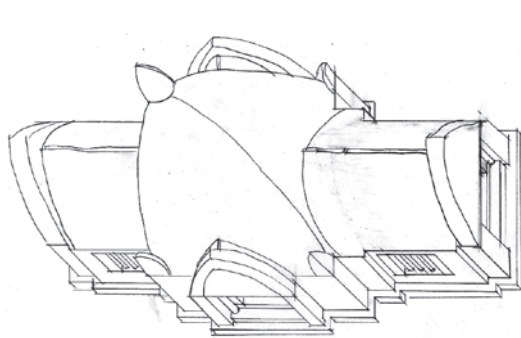


図8-1 D11当初の想定図

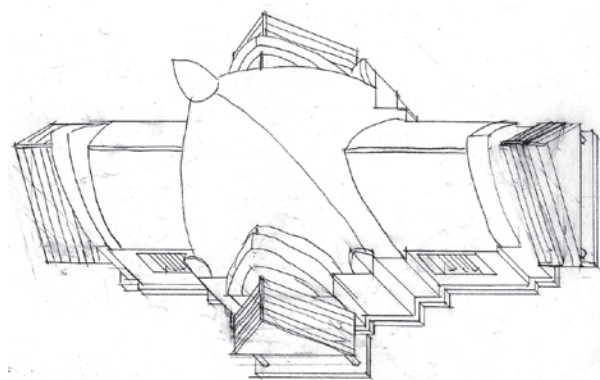


図8-2 D11増築後の想定図

## 4 D11の西に位置する門D25

### (1) 遺構の概要 (図9)

この一帯は表土が覆っていて、建物の基礎の一部しか見えない。この場所は2003年8月に第

39次発掘調査を実施している（図10）。上智大学アンコール遺跡国際調査団の発掘調査の成果をまとめてみる。

トレンチ23で、建物跡が検出されている。ラテライトの基礎の上面に、砂岩で基壇を造っている建物跡である（図11）。壁体が残存していないので、木造軸組の建物であると判断する。周辺に瓦が散乱して出土することから、瓦葺きだと想定される。D11の中軸線を延長して、この中軸線が検出遺構の



図9 D25発掘調査時遺構写真：筆者撮影

中軸線でもあると考えて対称に折り返すと平面図を得ることができ（図12）、規模が小さい門と想定される。D11に対しての西門と考えられよう。平面は単純な方形ではなく、角を示す石があるので、何度か屈折を伴う平面だったであろう。

さて、西門があるということは東門の存在が予想され、さらに西門・東門に連なる周壁の存在も想定される。しかし、D11を中心として西門の対称となる位置での発掘調査では門は確認できていない。また、周壁が想定される位置でも発掘調査は未着手である。周壁は確認できていないが、西門の存在を考えて、D11を囲う周壁があったと考えられよう。

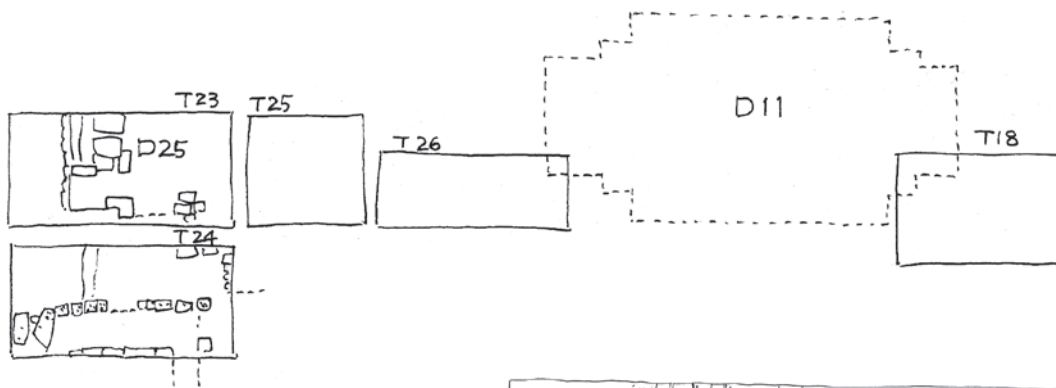


図10  
第39次発掘調査位置図：筆者作図

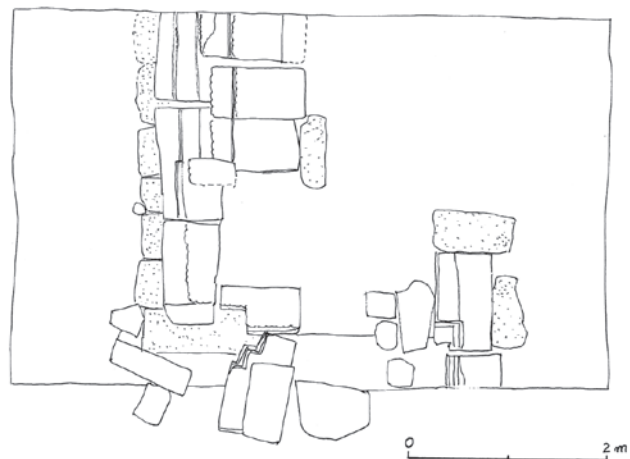


図11 T23区発掘調査遺構図：筆者作図

(2) 平面の変遷 (図12)

発掘調査で検出した基壇部を考察する限り、増築を認めることはできない。最初に建てた建物跡がそのまま残っていると判断するので、平面変遷はない。D02、D11の復原考察で前述したように、D25の遺構面には組積構造の壁の様相はないので、D25は木造で、屋根は瓦葺と考えられる。

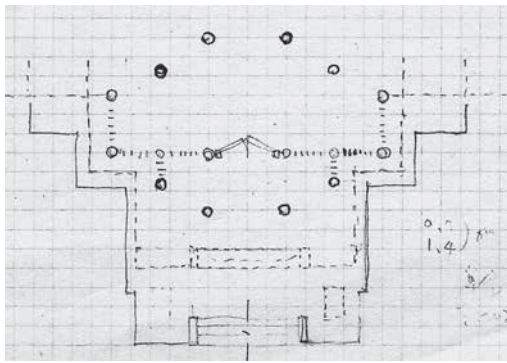


図12 遺構略平面図：筆者作図

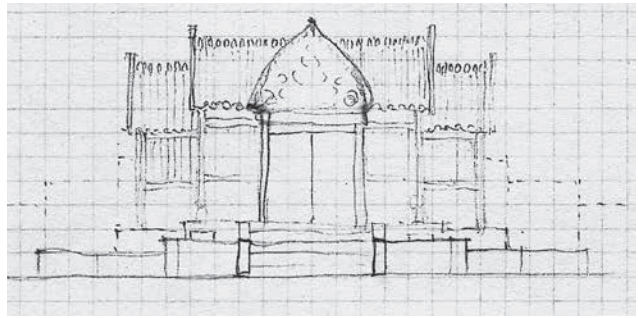


図13 想定復原立面図：筆者作図

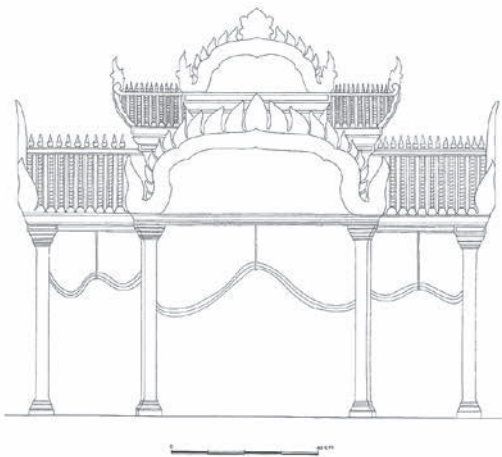


図14 アンコール・ワットの回廊に見える建物の事例  
J. デュマルセ『クメールの小屋組と瓦』  
(フランス極東学院考古学報告Ⅷ、1973)



図15 バイヨン周壁に見える建物の事例：筆者撮影

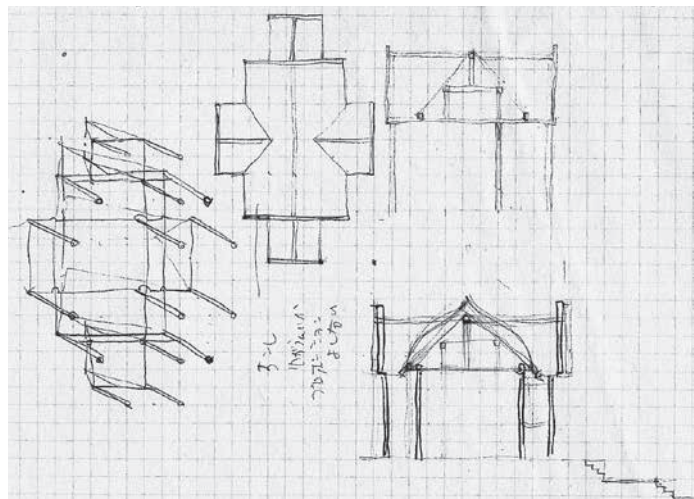


図16  
復原考察図。構造図・屋根伏図ほか  
：著者作図



### (3) 復原の考察 (図13)

アンコール・ワットやバイヨンのレリーフには、屋根を段違いにするような建物を多く表現している (図14・15)。遺構の様相から、この D25遺構でも屋根は段違いにするのではと想定した (図13)。

## 5 まとめ

D02、D11は増築の結果、瓦葺の部分をもつ建物であったことは確実であり、門 D25は木造建物であったと考えられる。D02、D11は前述のように増築を行っている。最終段階で、木造部分を増築しているということは、D02と D11は共通する。

D02は四周する壁を持ち、D11もおそらく四周する壁で囲まれていたと考えられる。発掘調査以前では、D02や D11は独立して建つ小祠堂ではないかと考えられていた。しかし、周壁を持つ小寺院の様相を持っている。アンコール遺跡群の中の同様の様相を持つ小祠堂や、独立して建つ祠堂についても、今後解明を進める必要がある。例えばタ・プロムや、プリア・カーンで (図17)、中心区画の近くに四周する壁で囲まれる建物を持つ小区画がある。アンコール地域ではないが、バンテアイ・チュマールにも同様の区画がある。これらの小区画について、論考は管見するかぎり無い。

アンコール遺跡群についてはさまざまに論考が加えられてきて、多くのことが明らかになってきている。しかし、解明すべき分からない事柄も多く、筆者は「東南アジアでの建築との出会いと研究」<sup>9)</sup>で未解明の諸点を指摘している。またかつて、バンテアイ・クデイの小建築について考察したことがある<sup>10)</sup>。

大寺院の中にさらに区画される小寺院のような部分の意味は何なのか。このことを明らかにするのは将来の課題である。

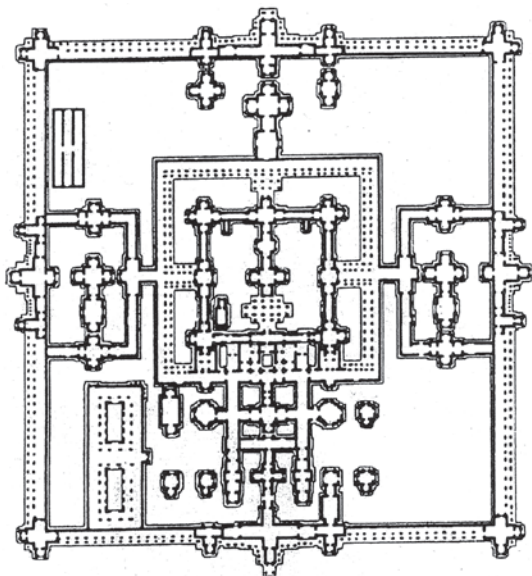


図17-1 タ・プロム中心区画  
千原大五郎  
『東南アジアのヒンドゥー・仏教建築』

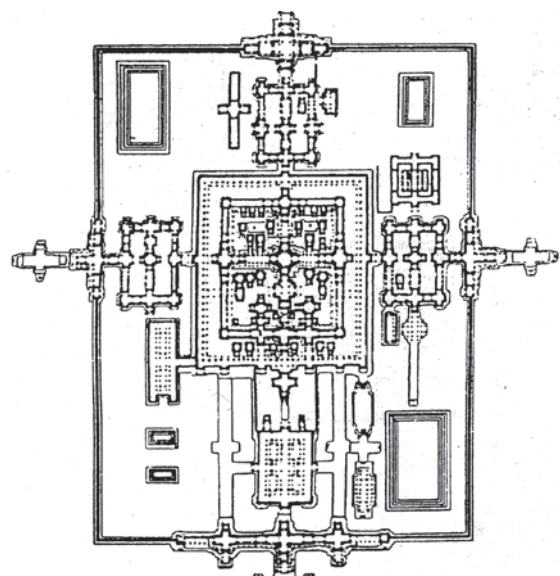


図17-2 プリア・カーン中心区画  
千原大五郎  
『東南アジアのヒンドゥー・仏教建築』

ただ、バンテアイ・クデイ、タ・プロム、プリア・カーンの小区画を並べて比較する限り、この順序に造営され、発展整備されていったようにみえる。本稿では、こうした指摘にとどめ、寺院の造営年代にも関わるので、丁寧な考察は将来に委ねたい。

## 謝辞

発掘調査の成果については、上智大学アンコール遺跡国際調査団から提供を受けた。記して感謝する。

## 注および参考文献

### 注

- 1) バンテアイ・クデイでの発掘調査については、下記論稿が詳しい。  
中尾芳治「発掘調査の経過」『アンコール遺跡の考古学』（連合出版、2000）  
中尾芳治「アンコール遺跡の考古学」『季刊文化遺産18』（島根県並河萬里写真財団、2004）
- 2) D02とは「バンテアイ・クデイ建物一覧」（上智大学アンコール遺跡国際調査団、1997）で名付けた遺構番号である。D区の2番目という意味。以下D11も同様。
- 3) 上野邦一「274体の廃仏の発掘と埋め方をめぐって」『季刊文化遺産18』（島根県並河萬里写真財団、2004）  
出土した仏像などについては、石澤良明、大村次郷『アンコールの仏像』（NHK出版、2007）などがある。
- 4) クメール建築の復原に関して、バンテアイ・クデイの一建物の復原を試みたことがある。  
上野邦一「半壊したラテライト建物の復元」『アンコール遺跡の考古学』（連合出版、2000）
- 5) 石澤良明『アンコール・王たちの物語』（NHK ブックス、2005）ページ249  
プリア・ヴィヘル地区に“10世紀初めのヤシャヴァルマン一世の治世の木造の寺院を建立していた”ことが碑文から分ると指摘する。
- 6) 上野邦一「東南アジアでの建築との出会いと研究」『カンボジアの文化復興（30号）』（上智大学アジア人材養成研究センター、2018）
- 7) 主室・副室の用語は、祠堂内にある空間を分割して名付けた仮称である。崇拜物を安置した空間を主室とし、その外側に配置される空間を副室と呼ぶことにする。副室のさらに外側に配置される空間を設けた場合、第二副室と仮称することにする。
- 8) コーベルアーチ（右図）は、迫出しアーチともいわれる。ローマの建築に見られる真正アーチに対して区別する用語である。石材やレンガを、内側に徐々に出して、空間を覆う技法である。クメールの建物や、ベトナム・チャンパの建物に用いられている。
- 9) 注6に同じ
- 10) 上野邦一「クメール寺院において中心区画周辺にあるラテライト建物について」『日本建築学会大会学術講演梗概集』（日本建築学会、1998）



コーベルアーチの事例：筆者撮影

## 参考文献

「カンボジアの文化復興」